

歩き続ける人々

大橋 洋介（おおはし・ようすけ）
弁護士 NPO法人宮城福祉オンブズネットエール 理事長

NPO法人「宮城福祉オンブズネットエール」主催の研修会を行っているときだった。いつまで続くのか分からない大きな揺れ。ビルがゆがみ、頭上からコンクリートの破片が落ちてくる。命を奪われる恐怖を感じた。

自宅から見える海沿いの地域で、夜になっても火が燃え続けている。恐ろしいほどに明るく輝く星空を眺めながら、断続的に続く余震に怯え、眠れない夜を過ごした。

翌日、新聞の朝刊で被害の実態を初めて知った。街中を自転車で行きながら、至るところで鳴り響く救急車や消防車のサイレンの音を聞き、ぶつけようのない怒りと底知れぬ悲しみに、思わず涙が出た。

加えて、福島第一原子力発電所の事故が、追い打ちをかけた。原発事故は、今もなお人々の生活を、肉体的にも、精神的にも苦しめ続けている。

初めて津波被害の現場に立ったとき、視界の中心から外れた間接視野の世界まで、全てが流され何

もない光景が飛び込んできた。視覚だけでなく、嗅覚や聴覚を通して、被災地の記憶が心に刻み込まれている。

津波被害については、「てんでんこ」という言葉が有名になった。

津波のときは、親子であっても構うな、一人一人てんでんばらばらになつても早く高台へ行く、自分の命は自分で守る。つまりは自助だ。

しかし、自分の命を自分だけでは守りきれない人もいる。津波により命を失った犠牲者の多くは高齢者であった。津波襲来に気付かなかった聴覚障がい者、停電により命の危険にさらされた在宅の重度身体障がい者。避難所での長期の生活により、身体機能や判断能力が著しく低下してしまった高齢者。地震や津波による直接的な被害は受けなかったものの、ライフラインの断絶、食料やガソリンの不足による影響を最も受けたのも、高齢者や障がい者だった。

高齢者や障がい者にとって、震災

はまさに生死に直結する事態であることが、悲しいほど露わになった。その後の生活再建も同じ。一度崩れた生活を再建することは、高齢者・障がい者にとって、とてつもなく大きな困難をともしなう。

自助では救えない命、生活を守るためにはどうすればよいのか。10年前に突き付けられた課題を、今また、私たちは突き付けられている。笑顔で食事すること、買い物のために外出すること、家族に会うこと、そういった人間としての基本的な行動が、目に見えない恐怖の前でたじろぎ、失われようとしている。

災害や疫病という、人間のコントロールがおよぶ領域を超えた大きな事象に続き、本来コントロール可能なはずの、飢餓、戦争、差別という人災がさらなる混乱を巻き起こすことを歴史は示している。

歴史に学ばなければならぬ。今まさに、人間の知恵、価値観、哲学が試されている。人としての在り方のようなものが問われている。

思うに、復興とは、経済的な観点からのみ語られるべきものではない。人としての普通の生活とはいかなるものかについて深く思いを馳せなければならない。

大きな禍をきつかけとして社会が変革されていくことは過去にもあったが、ときには世の流れに抗い、築き上げてきた大切な価値観を失わないようにすること、取り戻すことが重要だ。それこそが復興の真の意味なのではないか。

「ゆうべ暗い谷の道を歩きおえたから、いま頂への道を登っている。暗黒の終わりは光の門である。一寸先が闇なら、一寸先は確実に輝いている。そこで目をつむるな。そこで足を止めるな。」（むのたけじ）

震災から10年。まだ心は疼いている。復興はまだまだ途上だ。新たな禍も乗り越えなければならぬ。

絶望せず、歩き続けなければならない。目を開いて、一歩ずつ。光あふれる未来を信じて。